

同和問題（道徳）学習指導案

3年B組 男子10名 女子18名 計37名

指導者 森 口 健 司

1 主 題 誇りうる生き方を求めて

2 主題設定の理由

4月の学級開きの日より、私は生徒一人ひとりがいつか差別解消の主体者として常に美しい生き方を創造し、自らの生き方あり方に誇りを持って人生を生き抜いてほしいと願い、同和問題学習に寄せる私自身の思いや願いを語りながら、人間としての生き方について問い続けてきた。

最終学年のスタート、昨年度より営まれてきた、学年全体で同和問題学習に寄せる思いを語り合う授業を通じて、生徒たちは本音の部分語り出した。第3回目の学年全体学習、「きず跡」の学習のとき、A子が語る。「家族と一緒に同和問題について話し合うようになったんですけど、将来、私が地区の人と結婚したいと言ったらどうすると聞くと、父と母が言うんです。地区の人はきたない。家の誇りがよごれると言うんです。」続いてB子が語る。「私は今でもあそこへ遊びに行ったらあかんと言われる。あの子とつきあうなとも言われる。」これらの発言は生徒たちにとっても教師集団にとっても、今まで漠然としか見えていなかった部落差別の厳しい現実を見せつけられることになった。私はこのとき、同和教育とは、まさしく生徒たちの生命を大切に守り抜き、一人ひとりの生命を輝かせていく闘いだと思った。

1学期、厳しい差別の現実を目撃してきた生徒たちと共に、丸岡忠雄さんの講演記録「同和教育への希い」を中心に学習していった。その授業の中で、C子が語る。「私は3年生になるまでは、自分が部落出身であることを絶対かくしていこうと思っていました。でも、いろいろな資料を勉強し、みんなの意見を聞いて、その言っていることを本当だと信じたとき、この仲間だったら私の一番つらい思いを打ち明けることができると思うようになってきました。今、私は二人の友だちに自分が部落出身だということを打ち明けています。これからはもっとたくさんの本当の仲間を増やしていきたいです。」それに応えるようにD子が語る。「今、3年生でも、何人かの人が、自分が部落出身だということを全体学習なんかで言ったんだけど、今、C子さんが二人だけと言ったけど、ここにいる3Bのみんなの前や多くの先生方の前で言えたんだから、信じてくれたとりたいです。私も部落に生まれたんだけど、このクラスの子だったら、信じてことができるからこのことが言える。」この授業は、生徒一人ひとりが信頼という固い絆で結ばれ、差別解消への主体者として生きていく思いをぶつけ合い、同和問題学習に取り組む喜びをみんなでつかんでいく学習となった。

お互いの本当の思いをぶつけ合い、同和問題学習に取り組む喜びをつかみかけた生徒たちと、私は厳しい差別の中を生き抜き差別解消に向けて闘い続けた西口敏夫先生の詩「水平社宣言讃歌」を学習したいと思った。私が西口先生の詩「よろこび」を心の支えにして生きているように、生徒たちが讃歌に流れる思いや願いを受けとめ、この詩が生徒たちのこれからの人生の生きる励ましや支えとなってくれればと願う。そして何よりこの詩を通して、差別解消に向けて生きた先人の思いや願いを胸に刻みつけてほしいと思う。

水平社宣言を読まれた西口先生の心の中にわきおこってきた思い。それが私たちの胸を打つ。そ

の私たちの胸を打つ力とは何か。讃歌に込められた西口先生の思いは、全国水平社創立大会の日、京都岡崎公会堂に集まった人々が宣言を聞いて満場嗚咽した思いや、その中で壇上に立ち「いま、わたしたちは泣いている時ではありません。おとなも子どもも、いっせいにたって、この悲しみの原因を打ち破ろう。光り輝く新しい世の中にしよう。」と訴えた山田少年の思いとつながっている。水平社宣言の一つ一つの言葉に思いをはせながら讃歌をじっくり学び、差別解消に向けて生きる生き方、人間として誇りうる生き方とは何であるかを生徒一人ひとりとらえさせたいと願い本主題を設定した。

3 ねらい

厳しい部落差別の中で、すべての人間の解放を高らかにうたい上げた人間としての誇りうる生き方に共感させ、自分自身を見つめ、周りを見つめるところから、積極的に差別解消に立ち上がる意欲と実践力を育てる。

4 視 点 集団と連帯

5 指導計画

- (1) 常時指導 生活ノートや1分間スピーチなどを通して、自分自身の生活をもとに人間としての真実の生き方とは何かについて考えさせている。
- (2) 関連的指導（道徳）「ナイン」（井上ひさし）
人間は多くの人と信頼の絆で結ばれており、その固い絆が生きる支えとなっていることを理解し、よりよく生きようとする態度を養う。
- (3) 核心的指導 第一次 「水平社宣言」……………2時間
第二次 「水平社宣言讃歌」……………4時間（本時3／4）
- (4) 発展としての関連指導（特活）「わたしの進路」……………1時間
同和問題学習の中からつかみ取ったものを土台として、人間としてよりすばらしい生き方を求めるとともに、自分の進路について考えさせる。
- (5) 常時指導（発展）何でも語り合い、支え合う仲間意識を高める。

6 本時の指導

(1) 目 標

人間として、生命の輝く生き方とはどんな生き方をいうか、生きることの意味を求め、自らを解放する力を育てる。

(2) 展 開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 「水平社宣言讃歌」を読んでわかったことや思ったことを話し合う。	○ 差別の現実を明らかにしていく中で、差別されても正しく生き抜いた先人のすばらしさに気づかせる。
2 「水平社宣言讃歌」が訴えていること、自分にとって讃歌が何であるかを語り合う。	○ 自分にとって水平社宣言の一節一節が何であるかを確認しながら、「水平社宣言讃歌」の奥に流れるものをじっくりと考えさせる。

1991年11月19日（火）

主 題 「誇りうる生き方を求めて」（資料「水平社宣言讃歌」） 板野中学校3年B組

指導者 森口 健司

T : まだ少し時間があるんですけど、この前の全国大会（全日本中学校道徳教育研究大会徳島大会特別公開授業）の日に書かれた生活ノートを紹介して、思いを新たに今日の50分の授業頑張りたいと思います。

1991年（平成3年）10月31日木曜日、今日のこの日は忘れることができないだろう。「こんな授業、二度とできないかもしれない」と思っていた板野郡同和教育研究大会の授業さえ影が薄くなってしまう程の授業だった。昨日このノートには「緊張もプレッシャーもない」と書いたけれど、さすがに体育館に入った時は少しビビって、それでも隣のY O君としゃべったり、緊張のせいか顔がこわばっていたK H君をひやかしたりしていたら、いつもみたいな気分になってきて安心した。おまけに授業が始まった時にはやる気がすごい出てきて、何かわくわくしてきたくらいだった。そんな中で始まった授業、私は「今日こそ発言のスタートを切ってやる」と意気込んで挙手しようとしたら、ほとんどの子が挙手していて驚いた。いつもは発表なんてあまりしない子も挙げていて、「負けられない」という気持ちになった。でも、実のところなんか意見がありふれている感じで「こんなんで大丈夫かな」と思っていた。それがこんな授業になった。そのことが嬉しい。この授業に火をつけたのは、やっぱり同和問題学習のことを出したS Nさんだと思う。3年生になってからは2週間に一度くらいのペースで公開授業があつて、嫌々受けた授業も何度かあつた。でも、今日は同和問題を学習したからこそ成り立ったんだと思う。やっぱり学習してきてよかった。これで私なりに道徳＝同和問題学習ということが証明できた。10分ぐらいのオーバーで授業が終わった。もっともっと時間がほしかった。最後の礼が終わった時に周りから拍手が聞こえて、一回やんでいたのに退場の時また拍手してくれた。その拍手は私たちが体育館を出るまで続いた。とてもすっきりした清々しい気分になって、つつい顔がほころんでしまった。「ナイン」について言いたいことは全部言ったという感じだった。板野郡同和教育研究大会の授業の終わったとき女子の何人かは涙を流していた。今日の授業には涙はなかった。みんなにここにこしていた。Y Iさんが言っていたように本当に輝いていた。今日の私たちは準優勝どころか、優勝、ついでに全員にMVPでも贈りたい。それも互いの絆を確かめながらの優勝、要するに最高の試合ができたということで胸がいつばいだ。この授業を3年B組のメンバーで受けられたことをとても嬉しく思うし誇りに思う。みんなに心からお礼が言いたい。徳島県中学校同和教育研究大会は「3年B組の授業」を期待してたくさんの方がくるだろうけど、今日のような授業がしたい。そして、一生3年B組の絆を大切にしていきたい。先生もお疲れさまでした。そしてありがとうございました。

今日の授業、今まで取り組んだ2年間のいろいろな思いが集約した1時間になるように頑

張りたいと思います。始めます。

Y I (女) 起立、礼、着席。

T₂ 今日一筋の光を求めて、みんなと同和問題に寄せる思いを語り合いたいと思います。今まで取り組んできた同和問題の学習、その学習に寄せる思いを込めてみんなで読み合った水平社宣言讃歌について、(板書「水平社宣言讃歌と私」)水平社宣言讃歌が私にとって何であるか。今までの学習を通してかつての自分、今の自分を振り返りながら、思いを語り合いたいと思います。

SE (女) この資料を一番最初に読んだ時は、なんかやたら長くて読む気もあんまりならなかった、2回目ちょっと読んでみた時は、やっぱり半分くらいで何が言いたいかわからなかった、3回目ぐらいからわかってきたような感じがして、それでもまだよくはわかっていません。私にとってこの水平社宣言讃歌という詩は、今までの資料の中で一番難しくて、それでも一番身近に感じる資料です。

HM (男) 僕から見てこの水平社宣言讃歌は、僕がずっと前からいつも言っていることだけど、団結という言葉が好きで、その団結という言葉を変えてももっと好きになったような学習をした感じがします。団結は弱い者が強い者たちに勝つための一つの手段であるというのが好きです。団結の意味を学ぶことがなかったら、このクラスも今のような姿にはならなかったし、このような見事な同和問題学習とかには取り組めなかったと思います。

KK (女) さっきのHM君の意見によく似ているんだけど、私も団結という言葉が好きになって、郡同研の時にはすごく燃えたんだけど、途中いろいろあってそれで全道研の時に中山さんとかが支えてくれたのが嬉しかったです。

KH (男) 水平社宣言讃歌は僕にとって、今までやってきた全部の資料の総まとめで、今までの資料のすべてがこの中に入っているような感じがします。

KU (男) この水平社宣言讃歌は文としてはあまりまとまってない感じなんだけど、何かすごい力強いものを感じて、これが部落の人たちの本当の思いであるし、人間としてのあり方もすばらしいあり方を述べていると思います。

SN (女) 私もみんなと同じで今までいろいろな資料を学習してきたけど、「渋染一揆」にしても「意識の芽生え」にしても、今までみんなと勉強してきた資料は、結局この水平社宣言につながっていたんだということが水平社宣言讃歌を読んでわかりました。

MM (男) この水平社宣言讃歌を勉強して、その前に水平社宣言を学習して何となくだけどその水平社宣言を自分の生き方につないでいったんだけど、この水平社宣言讃歌を勉強したら、水平社宣言に書かれていることは、もっと生活の上に生かすことがたくさんあるんだということがわかってきたと思います。宣言の中に「われわれがエタであることを誇りうるときがきた」というのがあるけど、水平社宣言讃歌によって心から、自分が部落に生まれたということを誇りうるときがきたのだというように受け止められるようになりました。だからこの水平社宣言讃歌は僕が生きていくための支えとなり、また授業を頑張っていくためのエネル

ギーとなり、僕らにとって今まで学習してきた中で一番大切な資料になりました。

Y I (女) この資料は私にとってとてもいいものになったと思います。今まで私が一番好きだった資料は佐藤文彦先生が書いた「美しさを求めて生きる人生を」というのが一番好きだったんです。今までやった資料で部落の人が自分たちのことを書いた資料は、何かその人の気持ちになりにくくてわかりにくいことがあったけど、この水平社宣言讃歌というのは、部落に生まれたとか生まれなかったとか、そういうこと関係なくて人間としてあたりまえのこと訴えていると思うんです。今までの学習で自分も成長してきたからこんな思いになれるんだと思うけど、絶対部落差別はおかしい問題なんだから、自分が部落に生まれた生まれなかったというのは関係なくて、一人の人間として考えてみたら、本当におかしい問題だということをわからせてくれた資料であり、すごく自分に一番近いというか、わかりやすい資料だったと思います。

H I (男) さっきのMM君の発言につなげるような形になるけど、僕も水平社宣言や宣言讃歌を勉強してきて、自分の生き方の支えとなるものがいっぱいできてきたと思います。この資料を勉強していなかったら、やっぱりずっと部落に生まれたことを隠していこうという気持ちが先にきて、部落差別とたたかって生きるといような思いは沸き起こってこなかったと思います。今、なぜか嬉し涙というのか、何かそういうふうなのが流れてくるんだけど、やっぱりこの勉強してよかったと思います。

S N (女) H I君を始めクラスみんながいて、私が意見を言ったら、手を挙げて私の意見に付け足してくれたり、また誰かが言った意見に私が付け足したりして支え合っていて、そんな仲間ができたのはこの勉強をし始めてからで、水平社宣言讃歌という詩は私も一生大切にしていかなければならない一つだと思いました。

K H (男) 僕もS Nさんと同じで、やっぱり自分が発言したらみんなもそれに応えて発言してくれることがとても嬉しいです。そしてこの資料がなかったら差別の深い意味を一生わからずに過ごしていたかもしれません。

K T (女) 私はこの資料やこの学習から、自分一人ではないということがわかりました。怒りを言葉に変えることで、相手に苦しみや悲しみが伝わってよりよい人間としての結び付きが生まれ、私たちは深い絆で結ばれていくことがわかりました。

T S (男) 僕はこの学習に中から、このクラスはとてもすごいなあと思いました。3年生になったとき、始めの頃はあまり友だちもいなかったので不安だったけど、いろいろ解け込んでいて郡同研や全道研や、すごい授業ができてとても嬉しかったです。

Y I (女) ちょっと資料から離れるんだけど、私たちはずっと2年生の時から同和問題学習に取り組んできて、今までの授業の中ではすごく悲しくて涙を流すこともあったけど、今のみんなは悲しみではなくて差別に対する怒りで燃えていると思います。そして、前の郡同研の時はこんなにたくさんの先生方はいなかったけど、この県同研ではこんなにたくさんの先生方が私たちの授業を見に来てくれたということは、私たちにはすごいそれだけの力があるんだ

と思います。私たちには人を変える力があるから、絶対差別をなくすという自信も生まれてきました。やっぱり同和問題学習に取り組んできてよかったと思います。

MM (男) 今のH I君の涙のおかげで、みんなの支え合う関係がより強まり、またみんなが熱く燃え上がることができたと思います。郡同研の時はまだ悲しみの涙だったと思うけど、今は違うと思うんです。今のH I君もそうだったけど嬉しくてたぶん僕と同じような考えを持っているんだと思うし、人の涙というものはたぶん嬉しい時に流すからこそ、その一粒一粒の涙が一段とすばらしいものになるんだと思うし、悲しんでいるだけだったらこの問題は絶対に解決の方向には進まないと思います。このクラスは絶対自分の意見を本音でぶつけ合う授業ができているし、もし嘘で言っていることがあったとしてもそれを見抜く力がみんなにできています。でも最初の頃や1年生の時なんかは、うわべだけでほとんど自分の心とかをみんなにさらけ出すことがなかったけど、この1年半みんなとこの学習を続けてきて、みんなをよりよくわかって信頼する関係ができて、ナインでも習ったように絆とか団結とかの強さを知ることができたし、今まわりには仲間がいるからこそ、僕も頑張っていけるんだと思うし、たぶんみんなもそうだと思うから、まわりのみんなを信頼して頑張っていきたいです。

SN (女) 私も昔は本当に恥ずかしいんだけど、差別に無関心で小学校の時とか中学校1年生の時とか勉強していたことはしていたんだけど発表もあまりしなかったし、建前ばかりで差別はいけないとか、そういうふうなことばかり言っていたけど、2年生になって森口先生のクラスになって初めて差別の深いところまで知ったというか、そういう話し合いができるようになったんだけど、やっぱり始めの頃はしんどいなあと思うて、私には関係ないって思いよったんだけど、2年生の全体学習の時に友だちが泣きながら自分が差別されてきたこととか、部落出身だということを打ち明けてくれた時から、やらなあかんと思いだして、友だちをそこまで苦しめる差別を許したらいかんというふうに思うて、真剣に取り組んできたんだけど、やっぱり私一人では差別はなくならないけど、このクラスのみんなとだったら差別をきつとなくせると思います。

YO (男) 郡同研の時にH I君とか、たくさんの子が涙を流したけど、今H I君が流した涙は喜びの涙に変わっていると思います。

HM (男) 僕もSNさんと同じで中二の時は発表をしていたかもしれないけれど、ただ紙に書いた文をただ読んでいただけて、心の奥底にある思いを語ったりすることはなかったと思います。今はそのときそのときに思うことを友だちの発言を聞きながら、感じることを素直にまとめて発表するようになってきました。昔は授業前に書いた文章を読んできたので授業の中で沸き起こってきた僕の本当の気持ちをみんなに伝えることができなかったと思います。この学習はただ文を読むのではなく、そのときそのときに揺れている思いを語り合っていかなければ本物にはならないと思います。それから今勉強しているのに下を向いていたっている子がいたら、上を向いて発表してください。

YI (女) 私は中学校1年生のとき、やっぱり道徳の授業とかもあったけど、必ず自分のクラス

に部落の子がいてあんまりめったなこと言うたら、やっぱりやばいとか思っていて、結局綺麗事で何にも差し障りのないような言い方しか言えなかって、それで2年生の時に全体学習とかでまず本音を語るということを学んで、家のこととか一番自分の醜い部分をさらけ出し始めてそれから何ですよ、真剣にこの問題に取り組み始めたのは……。それで3年生になって振り返ってみたら、今はその部落の子とかそんな関係なしに差別している社会とかに立ち向かっていけると思うんですよ。だからそう自分が変わったことが今はとても嬉しく思います。

K O (女) 私は2年生に入って公開授業を始めた時、どうしてこんなことするんだろう。こんなことするからみんなは部落のことを知ってしまい、部落差別がなくならないんだと思っていたけど、そのまま放っておいたら、やっぱり昔の人たちが孫たちに間違ったことを教えてしまうから、今の私たちが正しいことをしっかりと真剣に勉強しなければいけないと思うようになってきました。そして、そうすることによって何年か先には部落差別は必ずなくなっていくと思います。

K T (女) 誰でも自分の苦しい部分を語ってというというのは苦しくつらいことだと思います。けどその苦しい部分を乗り越えて、本当の思いを語り合うことができるようになった時、私たちは本当の人間として生きることができるんだと思います。私も部落に生まれたけど、小学校5年生で自分が部落に生まれたということに気づいたんですけど、そのときは死んでしまいたいと思いました。今この同和問題の学習を積み上げてきて思うことは、黙くことばかりでなく怒りを持って、そしてその怒りを言葉に変えて訴え語っていくことによって、人間は本当に変われるということがわかりました。

S E (女) 全道研の終わったときに先生が、「先生が部落の人だからあんなに頑張れてあんな授業ができるというような囁きをした先生がいた」と先生の友だちから聞いたと言っていましたけど、私たちの中には部落に生まれなかった子もいるし、部落に生まれて悩んでいる子もいるけど、そんなこと関係なしにみんなでこの学習に必死に取り組んでいるのに、部落に生まれなかった子は部落問題をうわべだけで取り組んでいるように言われたみたいで、それを聞いたときすごくやさしかったです。

K K (女) 私もS Eさんと同じで先生から先生が部落出身の教師だからそんなに一生懸命なんじやと聞いたとき、すごく頭にきて生徒に本当の生き方を教えないかん先生が、どうしてそんな言葉が言えるんかなと思いました。

Y I (女) 私も先生からの話を聞いたとき、すごくやさしかったです。私たちはそんな部落に生まれたとか生まれなかったとか関係なしに、この差別自体がおかしいことだし、このことは人間としてなおしていかなあかんことなのだと思います。はっきり言って私はこの学習は、部落の人のためではなくて自分自身のためにこの問題の学習に取り組んでいるつもりです。

M M (男) その先生はたぶん、この学習の本当の重要性が受け止めることができていないんだと

僕は思います。そして、人の生命に関わるという差別の厳しい現実を知っていたら、そんな情けない言葉は絶対出てこないと思います。この問題は部落に生まれたとか生まれなかったということ抜きで、すべての人が自分自身の問題として考え解消に向けて取り組んでいかなければ、絶対解決していかない問題だと思います。人間は大人になると人間としてすばらしくなっていかなければならないのに、自分の差別心は棚において人のことはとやかく言うけど、自分は差別の固まりという先生もいるんだなと思うけど、僕たちはそんな大人や先生の差別心とかに気付いてしっかりと訴えていかなければ、部落差別を始めとする差別は、その人の心からは消えないと思います。そのことは僕も僕の中にも差別心があってこの学習をしっかりと続けていかない限り、その差別心は年をますます段々と大きくなっていくし、根強く残っていくと思うんです。だから、僕自身この学習を大切に続けていきたいと思います。それと部落差別を残してきた大きな原因として僕は、部落問題に無関心な人と、この学習を正しく学習してこなかったおじいさんやおばあさんなど、この教育を受けることがなかった人たちの二つに大きな原因があると思うんです。その中である意味で一番こわいのが無関心な人だと僕は思うんです。部落差別をなくすために生きる人生はものすごい喜びがあるけれど苦労も多いと思います。無関心な人は真剣に考えることが少ないということだから、無関心な人のほとんどが、差別とたたかう側と差別する側に分けたら、差別する側に流されてしまうと思うんです。僕は部落差別に無関心な人を絶対につくってはいけないと思うんです。すべての人が部落問題を自分自身の生き方に関わり、人の生命に関わる大変な問題なんだと自覚していかなければならないと思います。僕はこの学習は人間としての本当の生き方をつかんでいく学習だと思うんです。僕はこの学習から自分に自信がもてるようになって、人前でしゃべるのも緊張感がなくなって、いつも思いきり自分の思いをぶつけていくことができるようになってきたと思います。絶対に負けないというものをつかむことができたと思います。

T 3 今のMM君の発言につなげてほしいです。

KH (男) 全道研の授業のとき、先生をあの人は部落の人だからといった人は、単に部落ということを知っているだけでこの部落ということが大変な差別の問題であるという自覚がないんだと僕も思いました。さり気ない言葉であってもその人を絶望させたり、大きく傷つけて死に追いやっていくことだって起こってきたこの差別の問題をもっともっと真剣に自分自身の問題として考えられないのかなあと思いました。

SN (女) 私たちがあれだけ一生懸命頑張って発表して、周りの人とかがものすごい拍手をくれて胸がいっぱいになっていたあの中で、そんな人がおったと思ったらすごいショックでした。その人たちはちゃんと同和問題について学んでなくて、学ぶ環境も周りになかったと思います。私たちから言わせてみたら、その人は無関心な人というのもあるけど、将来同和問題学習に対する本当のことを知らないでずっと生きていくのは人間として惨めで、ある意味で人間としてかわいそうだと思います。

KK (女) 昨日、佐藤文彦先生の書いた本を読んでいたら、本の中に「一見無邪気に見える子どもたちの表情の奥にある悲しみが見えないのでは、教育はできない」というのがあって、その言葉がすごく心に残りました。やっぱりそういう心の奥まで悲しみが見えなかったら同和教育はやっていけないんだと思いました。

YI (女) この前の授業のときも言ったけど、同和問題の学習に取り組んできたことによって、大人だけでなくいろんな先生の裏側まで見えてきて、先生というのは尊敬するものという気持ちもあるけど、部落差別をしている先生は自分が教えている生徒まで結局差別していることになるでしょう。だから、先生不信みたいな感じになってきたんだけど、よく考えてみたら、私たちは森口先生に出会えてこういう授業をみんなで一緒にやれたから、ちゃんと差別の本質までわかっているけど、その先生たちは自分のおじいさんとかおばあさんとか、親から部落の悪いイメージを吹き込まれたままで何が何だかわからない状態で教師になって、そのイメージをぬぐいさることができない状態にいるんじゃないかと思うんです。だけどこの部落問題というのは考えてみれば本当におかしいことで、アメリカとかで人種差別とかがあるでしょう。それって見た目で黒人か白人か違いがわかるでしょう。その差別も絶対におかしなだけで、でも部落差別ってほんまに区切りがあるように見えてないと思うんです。先生から「ほんまに部落に生まれたと思うていてもその証拠がどこにも見つからなんだ」という話や、「自分が部落でないと思うていても自分が部落でない証拠もどこにも見つからなかった」という話を聞いたことがあるけど、ほんまにそうだと思うんですよ。何かその人の血が違うわけでもないのに、ほんまに自分が部落なんかどうも決定的な確証もなしに、人が勝手に「あの人が部落で、あの人が部落でない」と言って差別していくということはほんまにおかしいことだと思うんです。

T 4 水平社宣言讃歌についてみんなにいろいろな思いを求めたんですけど、やっぱり今までに取り組んできたものがあまりにも大きすぎて、宣言讃歌と今までに学習してきた思いとがいっぱい重なっていきますね。これは今までの学習の中でも話したんですけど、先生にとってこの宣言讃歌は宝物なんです。西口敏夫先生の「水平社宣言讃歌」という一冊の本、大事に大事にしています。その本の中にある「よろこび」という詩はこの十年近く心の支えとしている詩です。みんなと同和問題学習を積み上げてきた一つ区切りとして、大きく飛躍し、より大きな峠を越える一つとして、この宣言讃歌を勉強してきたわけですけど……。讃歌に触れてでもいいです。今まで取り組んできた中で、全体学習やクラスの同和問題学習、そういったものを思い起こす中で私にとってこの学習とは何だったんだろうか。かつての自分、今の自分、自分自身の奥に流れてきたもの、今流れているもの、そういうものを思い返しながら同和問題学習に寄せる思いをあと残された時間、語り合いたいと思います。

MI (女) 2年生からこの問題に取り組んで公開授業とかいろいろやってきたけど、さつきMM君が言ったように私は下を向いたままで発表をしないときもあって、私を信じて必死に自分を語ってくれる人に応えず下を見ていることは、その人を絶望さし、その人を殺すことになると私も思うようになって、絶対私は信頼を裏切る人を殺すような人間にはなりたくない

と思いました。

TK (女) 私は家庭訪問のときに先生から初めて、自分が部落に生まれたと聞かされて思いきり泣いてしまいました。それでも郡同研のときは自分の本当の気持ちをみんなにぶつけることができました。でもそのときもなぜか悲しくて泣いてしまいました。今はもうそんな悲しみや苦しみとかはなくて、この授業でも涙なんか流さずに発表できるようになりました。そんな泣いていた私を変えてくれたのは、私の友だちの支えや励ましがあったのと、友だちを心から信頼できたからです。私はその友だちに感謝しています。

MS (女) 今までの私は部落に生まれたということは、隠さなければならないものとしか考えていなかったけど、郡同研のときに私が部落に生まれたと言ったときみんなが支えてくれて、みんなが一つになれたなあと思いました。私は同和問題を学習していくことは人と人をつなげていくことだなあと思います。

TF (男) 今までこの学習をしてきて、最初の頃は手を挙げて発表するときに、自分で手を挙げようと思っていても、10分ぐらい手を挙げるのができなくてそのままみんなの意見を聞くだけだったんです。でもみんなの意見を聞いている中で、僕自身の中で変わっていくものがいっぱいあってやっと手が挙げられるようになったんです。それでも長い時間が流れていくうちに部落問題をやっぱり自分には関係ない問題という気持ちが出てきて、また手を挙げられんようになって、今も頑張らないあかんという気持ちと自分には関係ないという気持ちの両方があるんです。だから、いつもこの授業の度に自分を反省しながら頑張ってきているんです。そんなときにある子が資料についての考えをまとめる学習プリントをそんなん適当に書いてとけと言ったことがあるんです。そのとき僕はものすごく腹が立ったんです。その子と同じような気持ちにならんと心の底から腹を立てることができたのは、僕の中にまだ弱い部分もあるけど心の底から部落問題をなくしていなあかんという気持ちが強いだと思って、この気持ちを大切に頑張っていかなあかんと思って今頑張っています。間違っていることを間違っていると云えることってほんまに大切やと思います。僕は間違っている友だちに「そんなこと言うな」と言えたことによって、自分というものに自信を持ちました。

HI (男) 今日もまた一つ大きな峠を越えたと思います。やっぱりみんな頑張っているから、自分も胸張って頑張っていくことができるんだと思います。やっぱり「人の世に熱あれ、人間に光あれ」で、やっぱり人間みんな一緒なんだと思います。部落に生まれた部落に生まれなかったということにこだわるのではなくて、一人の人間としてこれからもずっと下を向かずに胸張って



頑張っていきたいと思います。そして、やっぱり何かしらんどいつも涙が出てきてしまうんだけど、これからは涙を流さないようにずっとこの学習やこの出会いを大切に、ずっと将来も頑張っていって、この3年B組の絆というものをいつまでも持ち続け頑張っていきたいと思います。

S F (女) 私はこのクラスになってから、中一のときにいじめられた子に今も変な目で見られているということをよく話したんだけど、それってすごい私の誤解だったんです。この前のその子と自転車置き場であつたんだけど、その子が話し掛けてきてくれてなんかその子がすごい変わったなあという感じがして、すごく嬉しくて何か私もその子のことすごい悪い目で見ていたけど、それってすごい私が誤解していたんだと思ったんです。ある意味で私がその子を見ていて反対に仲間外れにしているような感じだったけど、その子が話し掛けてくれたときに、この子はこんなに変わっているのに、私の勘違いでこの子を逆に苦しめていたんじゃないかなって、すごく自分の狭い心が情けなくなつて自分の思ってきたことを反省したんです。そして、ほんととは公開授業とかがすごくいやだつて、公開授業のときも何も考えずにぼんやりしていることがあつたんです。でも3年生になって森口先生のクラスになったときに、Y IさんやS NさんやM M君とかいろいろな人がすごい発表して授業中胸がいっぱいになってきて、心から私も頑張らないかと思うようになってきたんです。ほんとにY IさんやS Nさんやクラスみんながいてくれて私もこんな考えがもてたんだなあ、すごくみんなにお礼が言いたいです。

Y N (女) 2年生から取り組んできた全体学習を始めとする同和問題の学習は、私に勇気を与えてくれました。その中でいろんな友だちが自分をさらけ出して語ってくれているのに、私は下を向いたままずっと黙っていました。それが今では発表することはまだまだ難しいけど、語ってくれる友だちの言葉を自分なりに一生懸命に受け止めることができました。それが私にとって一番嬉しいです。

J K (女) 2年生から同和問題の学習をしてきた中で、私の心も大きく変わったと思います。自分が部落に生まれた人間として、自分自身の本当の気持ちをぶつけるような発言はできませんでした。でもこの前の全道研のとき、このクラスのみんなに自分が部落に生まれたことを打ち明けました。自分の心の奥にある本当の思いを語っていくことにより私は、人間としての本当の生き方をつかんでいくことができるんだと信じたからです。本当のことを訴えていくことはすごく勇気がいったけど、みんなが私を思いきり支えてくれました。あの授業の後、私は本当の友だちができたんだと思いました。自分の心を締め付けていた重苦しい部分を語ることができ、これからの人生を人間として堂々と生きていく喜びをくれたのは、先生や3年B組のみんなが支えてくれたからだと思います。

K T (女) 私はずっと前2年生のときは、自分には語ることはできないんだと信じていて、それを理由に発表することから逃げていました。それで繰り返し繰り返し発表できる子や語れる子がうらやましいとずっと思っていたんだけど、でもそんなことうらやましいと思うのがおかしいと思いだして、自分にもできないことはないんだと信じて発表したら、昔のことが嘘

のように発表することができるようになり、今はこうやってこんな大勢の人の中でも手を挙げて発表できるようになりました。まだ手を挙げることができていない人も、絶対できないことはないので一生懸命手を挙げて発表してみてください。

T 5 はい、頑張りました。

KK (女) 部落に生まれたというとても苦しいことをみんなに語っていき、自分自身が人間として胸を張り堂々と生きていくことができるかどうかは、周りのみんなの取り組んでいく姿勢や雰囲気が決まってくると思うんです。いくらその人に勇気があったって、周りがしらけていたりみんなで共に頑張ろうとする思いがなかったら、絶対に立ち上がれるものではないし、語ることもできないと思うんです。一人一人の仲間を支える周りの雰囲気がとても大切だと思います。みんなで一人一人を大切にしていって、よりよい雰囲気を作っていくことができるように頑張っていきたいです。

MO (女) 私はこの前、クラスの中で部落問題について話し合っていたときに、「自分の中にはおじいさんとかおばあさんとかが差別してきて部落の人を苦しめてきたという、人を差別してきたという血が混ざっているのがいやじゃ……」と言ったときに、YIさんとかが「この勉強を徹底的にしていって、そんなこと言うのがばからしくなってくるMOさんはMOさん自身でしかなくて……」と言ってくれたのがとても嬉しかったです。今までこの学習をしてきて私は差別していないと思っていたんだけど、この資料を読んで自分の中にもものすごく差別していたところがあるのに気付いて、自分の中にこんなに差別心があるのに、何かずっと無関心だったことが恥ずかしかったです。

MM (男) 涙を流すことではなく、自分が部落に生まれたということを誇りに思うことによって、この学習は人間としての本当の喜びをつかんでいくことができるし、より人間としてすばらしい生き方を求めて頑張ることができるから、もっともっと早い時期に自分自身が人間らしく生きるためにこの学習をとらえて、一生懸命にこの学習に取り組むことができたら、もっともっと自分自身成長していただろうし、もっと早く変わったと思うんです。小学校の頃や中学校1年生のときだったら、僕自身真面目に取り組むこともなかったし、授業を真剣にする姿勢も周りになかったし、何かうわべだけで終わっていたような授業だって、絶対何も進歩のない授業だったと思うんです。でも中学2年生から頑張ってきた今の自分を見ると、すばらしく進歩することができたと思います。僕は僕自身が部落に生まれたと知ったときものすごいショックが僕の中に沸き起こってきたんです。それはそれまでに部落のことなんかを小学校の高学年頃から教えられていたけど、部落の悪いイメージだけしか心の中になくて、とにかく部落というところは差別されて惨めなものとしが授業で教えてもらってなかったから、あんなショックがあったんだと思うんです。今考えてみると部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわなかったからそうなったと思えてくるんです。でも今はマイナスをプラスに変えるというか、自分をより大きく成長させていくことを教えてもらっているように思います。やっぱり小学校のときにもちゃんと学習して、中学校1年生のときにももっとちゃんと学習していたら、こういうショックも受けなかったと思うし、今僕たちが

続けてきたような学習をもっと昔から
続けていたら、部落差別というものは
もっともっと小さいものになっていた
と思うんです。ただ時間をこなすうわ
べだけの授業だったら、絶対この先な
んぼ同和問題の授業をやっているのも、
やったというだけで生徒の中には部落
問題を部落という惨めなところに生ま
れた人の問題としてしかとらえられな
い授業となって、本当の意味で差別を
なくしていく授業にはならないと思う
んです。僕たちが中学2年からやって



きた本音の同和問題学習をこれから先も大切にして、絶対部落差別をなくしていかなければ
ならないし、大きくなっても絶対差別者にならないようにしていかなければいけないと思い
ます。

RS (女) 同和問題を学んできて私は変わったと思います。1年生のときにお母さんとかお父さん
の前で同和問題の話をしたとき、お父さんもお母さんもとてもつらそうな顔をしたから、
もうこのことは絶対口にしないと決めていたけど、この頃だったらお母さんとかお父さんの
方から同和問題のことを話し掛けてきてくれるようになりました。私は同和問題の学習は人
間の本当の生き方をつかんでいく学習だと思っています。

KU (男) この学習をするまでは、クラスの友だちでも言葉の上の仲間という感じで、よく知ら
ない友だちもいたんだけど、この学習をしてきて一人一人が自分の存在を自覚してみんなが
助け合う雰囲気ができているから、本当の仲間というのが何であるかがわかってきて3年B
組のみんながすごい固い絆で結ばれたと思います。

SE (女) この学習をしてきて私のはつきりと思ったことは、人を変えていくのは周りであって、
自分が変わるのも周りの影響があって変わっていくんだと思いました。この学習のおかげで
私たちは何かすごい絆というか、切っても切れない結び付きができたと思うし、このメンバ
ーだったら高校へ行って離ればなれになっても、挫けそうになったらまた会って自分のこと
を言い合えて支え合っていけるという自信があります。

MT (男) 2年生の最初に先生と出あって、そのときに最初先生が「わしの目を見い」と言うて
「目を見て話をするもんじゃ」と言うて、先生の目を見ていてこの先生はどこか違うなあと思
いました。それでいろんな資料を勉強していく中で最初の方は、何か自分の書いているこ
とでも発表しようと考えて、震えながらも手を挙げて発表していたんだけど、繰り返し授
業があった中で発表しないで授業を終わったら楽だって、その後の授業も発表せんと黙って
下を向いて授業を受けたら楽だって、でもこのままずっとおるんではあかんなあと思うて、
何回か手を挙げて言おうと思ったんやけど、なかなか手が挙がらないでいたんだけど、差別

は絶対許したらあかんし、周りの雰囲気^{ふんいき}に流されて部落の悪口を言う人間に絶対ならないためにも、楽な道を選ばずに僕自身を鍛えるためにも発表していかなあかんと思うし、その頑張りが大きくなっても周りの雰囲気^{ふんいき}に流されないような人間になっていくことにつながると思います。

K M (女) 私はこの学習に取り組んでなかったら、差別心があつてずっと差別していたと思います。それでこの教育に取り組んできて少しずつだけど差別心がなくなってきたと思うから、この学習に取り組んできてよかったと思います。これからこの学習に取り組んでいきたいと思っています。

S N (女) 道徳教育の全国大会のときに、私の友だちが一人手を挙げられなかったと言って、すごい気にしとったんだけど、それでみんなのこと裏切ったことになるとか言うて、すごい気にしとったんだけど、それで「今度頑張ったらええで」と言うたら「今度頑張る」と言うふうに言よって、それで今発表してくれてすごく嬉しいです。

K T (女) 下を向いているのはやめてください。何も逃げることもないし、何もおそれることもないと思います。緊張はみんな一緒だと思います。今日自分は手をあげられなかったと過去形にしないで、この場で今という瞬間を大切に^{たいせに}して語ってほしいと思います。

K N (男) 僕は2年生のときは、同和問題とかはどうでもいいと思っていました。全体授業のときでも先生に当てられて「ああ、いややなあ」と思いながら、学習プリントを見ながらでしか発表できなかったけど、今はこの3年B組になってから下手でも自分で下を向かずに発表することができたのが嬉しかったです。

K K (女) 50分という時間はすごく短いような気がします。私はもうだいぶ80%ぐらい、私の心は変わっているけど、まだ変わっていないところもあると思うのでB組のみんなと一緒に変えていきたいと思っています。それで私のお母さんとか家族の心も変えていきたいと思っています。

Y I (女) もう時間がきてしまつて言いたいのに言えなかった人もいると思うんですよ。だけどこの3年B組だったことを誇りにして、これからもずっと頑張つてほしいと思います。そして、部落に生まれた人はこれは絶対に隠して悲しんでそれですむ問題じゃないと思います。絶対この問題はおかしいから、絶対立ち向かつていかなければいけないと思います。そして、先生から聞いたことがあるんだけど、私たちがみんなで燃やし続けた部落差別をなくしていく光と炎を絶やすことなくずっと一生持ち続けて、差別解消まで共に向かつていきたいと思っています。そして、この光と炎を大切に燃やし続け、私たちのこれからの人生において出会う人にこの光と炎をともし続けて、この差別解消の取り組みをすべての人の願いにしていきたい。そしてそのときには絶対日本から部落差別はなくなっていると思うんです。だから今ここにおいでる先生方も、私たちのこれだけ頑張った姿を見てくれたんだから、この火を絶やさずにずっと差別解消の日まで頑張つてほしいと思います。

T 。 終わります。

Y I (女) 起立、礼、着席。